

## 「知事賞」

「どこか、遠いかなたから」

和田 紀世美（京都府）

眼科病棟四階四〇七号室のドアを入ると、窓側のベッドに母が居た。「どうして昨日の電話で知らせてくれなんだの！」と私。「心配かけると思うたし、白内障の手術は簡単と言われたけん」と母。あの朝、いくらかけ直しても繋がらない電話に胸騒ぎした私は、母のかかりつけの先生へ問い合わせ、事を知ったのだった。私は、仕事と家庭の段取りをつけて、広島行き電車に飛び乗った。親子なのに遠慮なんかして、と、母に腹が立った。

気丈に見えた母だけど、眼の手術は初めてだ。血圧を測られると一八〇もあって、手術の時間を遅らせてくれることになった。私は、母から鍵を借り、勝手知ったる我が実家へ急いだ。母の好きな五木ひろしのCDは、すぐ見つかった。それを持って再び病院へ戻り、イヤホンで母に聞かせた。血圧が正常に戻った。無事手術を終えた母の開口一番は、「あなたが白内障の手術の時は、お母さん行ってあげるけん」だった。仮にその時が三十年先として、母は百十一歳になっているはず。

私は、どんな言葉を返したのか覚えていない。

やがて私も七十歳半ばになった夏、白内障の手術を受けることになった。周りには大丈夫よと言ってくれるものの、自分の事になると緊張した。手術台の上で、私は身を固くして手を握りしめていた。ところが気持ちとは裏腹に、ウトウトし始めたのだった。

すると、夢なのか、母が私をのぞき込んでいる。子供の頃、いつも見たやさしい愛顔で私をつつみ、手術の間中そばに居てくれたのだった。私は、とても安らいでいた。

主治医の先生の「はい、終わりましたよ」と言う声で私は我に返った。病室のベッドに戻って考えた。少しずつ記憶が蘇ってきたのだった。母は、約束してくれたことを忘れていなかった。ありがとう……と私は何度も呟いた。私の胸の中で、母の愛顔が灯り続けた。

あの日、母は、どこから来てくれたのだろうと今も思う。

「特別賞」

ママ、お手てが切れちゃうよ

高田 智子（滋賀県）

「ママ、お手てが切れちゃうよ」

手のひらに乗せた豆腐に包丁を入れようとすると、幼稚園児の息子がそう言っただけで涙をこぼしました。コロナで息子は園が休み、私もしばらくパートの仕事に來なくてよいと言われたその日、二人きりの昼食に味噌汁を作ろうとしていたときのことでした。

「大丈夫。お手てまでは切れないよ」

私が何度説明しても息子は合点がいかない様子。私のエプロンの端をつかんで、大粒の涙が真っ赤な頬に伝っています。私は手の上で豆腐を切るのをあきらめ、まな板の上で切ってから鍋に投入。おかげで豆腐の角は崩れ、汁のなかで無残にも破片が浮いています。豆腐の美味しさは、そのすつきりとした切り口にあると思っっている私は、すんでのところで舌打ちしそうになりかけましたが、ふと、こう思い直しました。

（私のために誰かが涙を流して心配してくれる。大人になってからこんなことがあっただろうか）

私はさっきまで煩わしいと思っていた息子をぎゅうぎゅう抱きしめていました。

思えば私は、それまで息子に、自分が料理をしている姿をほとんど見せたことがなかったのです。私は朝から晩までパートに行っています。朝食は息子が寝ている間に作ってしまおうし、昼は園で給食、夕食はたいいてい母が来て作り置きしてくれたもので済ませます。今回、たまたまコロナで互いが家にいる機会があり、こうして息子に私の調理風景を見せることになったのです。もしステイホーム期間がなければ、「ママ、お手てが切れちゃうよ」と身も世もなく泣き叫ぶ息子の姿は見られなかったことでしょう。

愛顔といえは、普通は、笑顔を思い浮かべるかもしれませんが、私にとっての愛顔は、自分のことを心から心配して涙をこぼす息子の泣き顔です。その日食べた、豆腐が崩れた味噌汁は、おいしかった。

## 「特別賞」

### 祖父は職人

大田 彩乃（愛媛県 高校生）

私の家は、車屋さんだ。田舎にあるそんなに大きくはない車屋さん。そこで私の家族は働いている。

私は小さい頃、たくさん夢があった。その中の一つに「車の塗装をした」という夢があった。これは祖父の影響である。祖父は、車の塗装をする仕事をしている。父や母、祖母、父の弟は車の整備や営業、車検などをしている。祖父だけ仕事内容が他の人と違う。そんな家族の中で唯一というところに最初はひかれたのだった。祖父の仕事に興味を持った私は、祖父の作業場にたくさん行くようになった。作業場にはいろいろな物が置いてある。塗料の入っている缶、紙やすり、塗料と混ぜる薬品、スプレー、ブラシ……何も知らない私には全部が新鮮で魔法の道具に見えた。気になる物があると、質問をした。祖父が作業を始めると、じっと横から眺めた。そのたびに祖父は優しく丁寧に、幼い私でも分かるように説明をしてくれた。しかし、塗装中は薬品や塗料を使うため、近くで見ることができない。そんな時間は退屈でもどかしかった。でも、嫌いじゃなかった。作業が終わって時間がたつと、その部屋に入れてくれた。私は感動した。塗装前に色を落とされグレーになっていたパーツが元通り、いや、それ以上につやのあるきれいな白に染まっていたのだ。これは祖父にしかできない魔法のような技術だと思い、心から尊敬した。傷が無くなり、きれいになった車をお客さんにお返しする。その場にはいつも祖父はいない。ただ、嬉しそうに車に乗って帰られるお客さんを見ると、私は祖父が誇らしくて笑顔になるのだった。歳をとっても職人のように仕事をしている祖父は、今でも私の憧れの存在である。

私の家は、車屋さんだ。田舎にあるそんなに大きくはない車屋さん。そこで私の家族は働いている。今日もたくさんのお客さんの車を修理している。大切な車を直し、笑顔で愛車と共に帰ってもらえるように。

「優秀賞」

目覚しおりん

松田 良弘（大阪府）

チン！チン！チン！チン！チーン！

我が家の朝の音。階段の下で祖母が仏壇から拝借した“おりん”を連打する音だ。その音は、2階で寝ている私に笑顔を届けた。

子供の頃、私は朝が苦手だった。二度寝三度寝は当たり前、何度も学校に遅刻をしていた。そんな私に呆れた祖母が、おりんを使つて起こしてくれるようになったのだ。

祖母は足が弱く、階段の登り降りが出来なかった。始めは階段の下から声をかけたが、私には届かなかった。次に階段の手すりを杖でカンカン鳴らした。しかし、これは自分の手が痛くなるらしい。そして考えたのが、この“おりん作戦”だったのだ。

「仏さんの声だと思えばあり難いでしょう」と、いたずらっぽく笑う祖母に、

「バチ当たりなことをしないで下さい！」  
母は呆れながらも、2階にいる私を呼ぶ時は遠慮がちにおりんを鳴らしていた。

しかし、このおりん作戦は大成功だった。スッキリと心地のいい朝を迎えられたのだ。おかげで遅刻もなくなり、一日を楽しく過ごせた。それは、おりんに刻まれた祖母の思いが、私にも届いていたからだろう。

戦時中、空襲の度に祖母と子供達は狭くて暗い防空壕に避難した。子供達は怯え泣いていた。そんな子供達のために、祖母は防空壕の中でおりんを鳴らした。おりんの音を拍子に、歌を歌うのだ。祖母達は爆弾の音にも負けない楽しい歌を、いつまでも歌い続けた。

しばらくして、祖母は認知症が進み施設に入所した。そしてその数年後に亡くなった。葬儀には施設の職員の方も来てくれた。

「おばあさん、毎朝決まった時間になると、楽しそうにお茶碗を箸でチンチン鳴らしていました。おかげさまで、私達職員はその音を時計がわりにさせて頂いていました」

今も祖母のことを思い出すと、どこからかおりんの音が聞こえてくる。そして、祖母の愛顔が朝日のように輝いている。

「優秀賞」

## 大将だんだん

嶋田 数之（京都府）

京都の大学通りにある我が家の近くに、二年ほど前、豚骨ラーメン店ができた。B級グルメ本に紹介され、昼前から学生らの長い行列ができる。狭い道はタバコの吸い殻やゴミが散乱し、近隣の住民は眉をひそめていた。その風景に三月ごろから変化が起きた。コロナ禍で客足がぱったり止まったのだ。大学が九月までオンライン授業に切り替えたことで、行列どころか客が一人もない日もある。

店を覗くと、仏頂面の店主と目が合った。

「コロナは困ったもんやね」

ぼくはあわてて取り繕った。店主がじろりと睨んだ。町内会の班長のぼくは、会費の集金でたまに店を訪れる。そのついでに地区住民からの苦情もやんわり伝える。だから店主がいい顔をしないのはよくわかる。

「コロナより先にこっちが逝てまうけんな」

店主は四国なまりで無愛想に言った。

ぼくはこの機会に、じっくり店内を眺めた。「こっ तरी」「濃厚」など脂ぎったメニューの最後に「さっぱりラーメン」というのがあった。

「大将、これは薄味の豚骨ラーメンか？」

「いんや、昆布こんぶと鶏とりがベース。若いもんは食わんが、ご近所向けに工夫したスープや。宣伝せんけん、近所は誰も来てくれんがのう」

京言葉の「さっぱり」は「あきまへん」の意味やがな…。でも武骨に見える店主が実は気遣いのある人だと知って、嬉しくなった。

六月になり「今月末で閉店」と張り紙が出た。コロナのせいだ。

閉店の前日、ぼくは初めて客として入った。ほかに客はいない。

「大将、さっぱりラーメン食べに来たで」

店主は目を丸くし、やがて相好を崩した。

「あいよー。さっぱり一杯、だんだーん」

麺を茹でる店主の顔が湯気で汗ばんでいる。

店主はさり気なく顔をぬぐった。それが汗でなく、うれし涙なのをぼくは知っている。店主の、最初で最後、そして最高の笑顔を、ぼくは湯気の中でずっと見ていたから。

大将だんだん。いつかまた食わせてな。

「優秀賞」

## 鈍色にびいろのそら

杉野 典子（愛媛県）

昭和32年。両親が離婚して父方の祖父母に育てられていた私は、東京に移り住んでいた父親に引き取られた。中学2年の春だった。

新しい家に着くと新しい母がいた。とても優しい人だった。父は日本橋の製菓会社で働いていて羽振りもよく、松山の小さな家とは一転して、私専用の部屋と大学生が使うような立派な机と椅子が与えられた。とても嬉しかった。転校した中学では「なもし女」と松山訛を馬鹿にされ仲間外れにされたが、優しい両親のことを思えば耐えることができた。

しかし半年後、両親の態度が豹変した。義母に子供が産まれたのだ。全ての関心は赤ん坊に注がれ、私は義母に言われるまま毎日みんなの洗濯とおしめを洗った。手があかぎれでひどく痛んだ。お弁当も作ってはくれなくなつた。日曜日はいつも父と母と赤ん坊の3人で外出し、夜は私ひとりでご飯を作つて食べた。もう希望も何もなくなつてしまった。

そんなある日、学校で写生大会があつた。描かきたいものなど何もなかった私は、ただ空だけを描かいた。晴れていたのにもかかわらず私が描かいた空は鈍色にびいろだった。

「面白いもの描いているな」美術の島田先生がやって来て「そこに黄色やピンクを入れてみるといい。色つていうのは自由なんだ」と言った。その通りにしたら、雲が流れだした。びっくりした。

「何か困っていることがあつたらいつでも来なさい」あまりに暗い絵を見て何かを察したのか、先生はそう言って私に微笑んだ。誰かが自分のことを心配してくれる。そのことがただただ嬉しくて涙が溢れた。

その絵は展覧会で賞を貰った。以来、絵のおかげで私はクラスで一目置かれる存在となつた。よれよれの服を着ていつも美術室でひたすらキャンパスに向かつていた島田先生。あの時の先生の言葉がなかったら今の私はない。

## 「優秀賞」

### 「私とおばあちゃんとマスク」

水本 千尋（愛媛県 高校生）

新型コロナウイルスによってマスク不足が大問題になっていた。マスクを付けていないと、「マスクないの？なんで付けないの？」という目で見られてしまう。まるでマスクを付けていない人に人権はないとでもいうような顔の人であふれている。

ある日、私はマスクを買うために外出した。みんなマスクを手に入れたくて、開店前から行列ができている。私はマスクを付けていなかった。知らない人からの視線を痛いと感じた。怖くて、私はどうしたらいいんだろうと思った。そんな中、一人のおばあちゃんに声をかけられた。「あんた、マスクないんか。これやらい。」ジャージ姿で、怒った感じのするおばあちゃんから、紙マスクが差し出された。ちよつと怖い雰囲気のおばあちゃん、本当にもらっていいんだろうか……ととまどったけれど、そのマスクを付けて、私は冷たく突き刺さる視線から解放された。晴れてマスクを買うことができた後、改めておばあちゃんにお礼を言うと、「このご時世だから、仕方ないよ。」と言われた。

私がおばあちゃんと再会したのは、朝の登校途中だった。それ以来、登校途中の道ばたでたわいない話をするようになった。おばあちゃんは毎朝四時に起きてラジオ体操をしているとか、八十七歳にしてすべての歯であることが自慢なのだとか。最近行ったおいしいお店の話やニュースの話もする。私は学校の宿題の話や、実習でパウンドケーキやパンを焼いた話をした。実は、おばあちゃんは明るく気さくで、人と話するのが大好きなのだわかった。

今では、おばあちゃんに挨拶をして登校するのが、私の日課となっている。おばあちゃんは私を見かけると、遠くからでも「ちーちゃん、おはよう。」と声をかけてくれる。私は、おばあちゃんのかわいい笑顔を見ながら「今日も頑張ろう」と思う。

「優秀賞」

## 魔法の愛顔

村上 力也（愛媛県 高校生）

静かな部屋の中から、笑い声が聞こえはじめた。その笑い声は、とても楽しそうで、大きく、生き生きとしていた。誰だろうと思つて部屋をのぞいてみると、案の定、私の大切な妹だった。「また笑っている。」と思いがら、私も愛顔になった。そんな妹は、私からはルビーのようにきらきらと輝いて見えた。

私の妹は重い障がいをもっていた。話すことはできないが、声を出すことはできた。感情もしつかりとあつた。悲しいときには泣いて、うれしいときには笑う。私から見たら、ごく普通の人間だった。だからこそ、そんな妹にもとびきりの笑顔があつた。妹は、いつも突然笑いだす。何が面白いのか、なぜこんなときに笑うのか私にはわからない。もちろん、私の家族も誰一人知っているはずがない。理由を聞きたくても聞けないのだから。妹の突然の愛顔を見ると、なぜか誰もが愛顔になった。もちろん私も。私は考えた。「妹は周りの人を愛顔にさせる、魔法のような力を持っているのではないだろうか。妹の愛顔は『魔法の愛顔』なのではないだろうか。」と。そんな愛顔は、いつも私の励みとなっていた。どんな辛いときにも、妹の愛顔を見れば元気になれた。しかし、今ではそんな愛顔も見ることができない。妹は、今から三年前に天国へ旅立ってしまった。十年というとても短い人生だった。そんな人生の中でも、妹はたくさんの愛顔を作つて私たちにプレゼントしてくれた。私以上に愛顔を見せていた。

今、目を閉じるとあの愛顔が浮かび上がってくる。『魔法の愛顔』が。私は辛いとき、苦しいとき、過去へ帰つて、またあの愛顔を見たい、また妹から元気をもらいたい。そんな気持ちでいっぱいになる。しかし、どうやっても過去へ帰ることはできない。いつまでも妹に頼っていてはいけない。だからこそ、妹の『魔法の愛顔』を自分が作れるようになりたい。そう、あのみんなを幸せにする愛顔を。



「優秀賞」

## 秋の夕暮れ

横山 紗音（愛媛県 高校生）

秋の夕暮れ。私はそれが途轍もなく好きだった。「好き」という言葉では足りないかもしれない。泣いてしまうのだ、夕暮れを見ていると。言葉に出来ない何かに惹かれて、悲しくもないのに涙が零れてくる。

その想いを友人に話すと、決まってこう返ってきた。

「何それ、変。ちよっと引くわー。」

そう言い放った友人が間違っているとは思わなかった。ここまで夕暮れに惹かれる方が変なのだ。そう思っただけ、寂しかった。

ある秋の日のことだった。この時期、部活終わりに、三階の美術室から見る夕暮れは格別で、私の日課となっていた。その日の空はだいだいいろ橙色としゅいろ朱色が空いっぱい溶け合いながら、沈みかけの黄色い夕日に集まっただけ、大きな線香花火のようだった。あまりに綺麗だったから、私は、やはり泣いてしまった。

そこに部活の後輩がやってきた。彼女は、私が少し泣いているのに気づいて驚いていたが、何かを察してくれたのか、私の隣で「いい夕日ですね。」と笑った。

衝撃的だった。引かれると思っていた。夕暮れを見て泣くなんて、よほど変わっているか、自分に酔っている人くらいだと、私自身思っていたのだから。

それどころか、日がたつにつれ、他の部員も夕暮れを眺めに来るようになった。

一人、二人と美術室の前に人が増えていく。しまいには、顧問の先生までやってきて、部のみんなで夕暮れを眺める時間ができた。夕暮れが特に綺麗な日は、写真に収めて作品にしてみよう、という案も出た。

いつしか、私は夕暮れを見て笑うようになっていた。そのことに気づいて、私はふと、あの時の後輩の方を振り返った。すると、長く伸びた影がいくつも並んでいるのが見えて私は夕暮れ以上に感動するものを見つけたのかな、とまた笑ってしまった。